

5 年 1 組

自分たちの手でつくりたい わたしたちの村 ～沼地開発プロジェクト～



ねえ、先生、総合何する？

登校2日目、Aさんがこう聞いてきました。もう動き出したい、追究したい。やる気に満ちたAさんがいました。私は3月から総合の活動について考え続けていました。いろんな活動を考えた結果、私は子どもたちと「米づくり」を学んでみたいと考えました。お米がもつ魅力や米づくりを通してたくさんの人やモノとの出会いに学びがあると感じたからです。そこで、お米の食べ比べをしてみました。コシヒカリ・あきたこまち・風さやか・玄米・もち米の5種類を食べ比べてみました。うるち米でも品種によって味の違いがあり、食感や風味などを感じていました。「これ家で食べてるお米だ!」「風さやかは初めて食べたな」といった感想がありました。もち米は、もちもち食感と甘みが強く一番人気でした。次の日には、朝からもち米を研ぎ、炊けるのをまだかまだかと待っているAさん・Bさん・Cさん・Dさん。おもちをつく気です。算数の授業中にお米の香りが教室に漂います。朝なのになんだかお腹が減ってきた気がしました。もち米について砂糖やきな粉もつけてきな粉もちの完成です。給食中に友だちと分け合いながらおいしそうに食べていました。そんな様子を見て、米づくりを私から提案してもいいのではないかと感じました。実は、私から提案することを躊躇していました。「結局先生が決めてるじゃん」と言われてしまうからです。子どもたちのしたいことと教師が共に味わいたいこと。これが合致したときによりやくスタートできる総合。でもお米に興味を持ち始めているのは事実です。提案してもいいはずと思い、お米の魅力や米作りから感じられること、日本社会全体の米不足問題など米づくりに対する私の思いを20分も語ってしまいました。「みんなはどう思う?」と聞きます。すると「米づくりは総合じゃない」と返ってきました。もちろん米づくりに賛成した子も多かったのですが、「米づくりは失敗したら収穫できないからチャンスは1回」「汚れるのが嫌」「失敗したら意味がない」「何回も失敗しないと成功につながらない」という意見が出てきました。何度も失敗し、火起こし器という道具に働きかけられた火起こしとは違い、稲の生育と対話しながら育てていく米づくりが不安だったのでしょう。そして半数近くの子が違うことをしたいと言っていました。Eさんは一人一匹の動物飼育。Fさんは火起こしのつながりからキャンプ。Gさんは登山。Aさんは販売。その中でも動物飼育や販売のことが話題に上がりました。命の大切さを学べる。3年生まで飼っていたアヒルのツムピーやこはく、やぎのミロから学んだこととここでもう一度動物を飼うことや販売することの意味を考えてみたくなりました。



“やってみたい”から“学んでみたい” 友の声を聴く子ども

振り返りには、子どもたちがたくさんのに興味があり、やってみたいことがあふれていました。「どうしてお米を売りたいと思うの?」と聞くと「今お米が高いから、地域の人のためになってくると思う」と答えたり、「キャンプをすることでどんなことが学べそう?」と聞くと「自分たちのくらしとか自然についてもっと知れると思う」と答えたりし、わたしたちが学びたいことが何なのかが見えてくるようでした。「くらし」「自然」「地域」がキーワードとなり、私がもう一度提案してみました。それは「むらづくり」。初めはピンとこない様子でしたが、「家とか作るってこと」「動物も飼える」「果物を植えたい」「えー何それ、めっちゃいい」と子どもたちの目が輝いていました。Aさんは「ねえ、先生。掃除しに行った方がいいかな」とすでに体が動き出す姿がありました。5の1全員が「むらづくり」へと同じ方向を向いて歩み始めようとしています。自分の考えが友に伝わる。友の考えを受け入れる。否定されない安心感が生まれる。そして話し合いの場で殻を破って自分の意見を伝えようとする子がいる。わたしたちの活動だからこそ本気で話し合い、みんなが着地できる場をつくり出すことができました。

- ・村を作ってみたい!だって全部そろってるしすごく楽しそう!早く作りたい!5年の総合、すっごく楽しみ!! (Aさん)
- ・前回の感想を聞いているときに、反対の言葉が出てこなくてよかったと思う。村づくりはすべての意見をつなげてあるからいいと思う。一番いい考えだと思う。(Gさん)
- ・村づくりはやってみたい。火起こし、お米などいろいろつながっていていいと思う。村をつくるなら小さくていいからクラス全員分の部屋か、小さい教室みたいな(全員が集まれる場所)を作ってみたい。(Hさん)
- ・全ての条件がそろっていていいと思う。水をひく。村を作る場所でまず草取りをしたい。家をたてるとしたら昔の家をそのままできるだけ再現したい。歯車もつくりたい。ドアやまど、キッチンもつくりたい。くだものも米も育てたい。庭をつくりたい。かまを作りたい。(Iさん)
- ・家を増やさないで村とは言えないかも?用水路みたいなのを通せば最適。土器もつくりたい。(Jさん)
- ・村はいいと思うけどせまくて家とかたてられないんじゃない?お米をつくる場所もなくなっちゃうんじゃない?草とかいっぱいあって時間めっちゃかかるんじゃない?カエルとかがいて嫌な人はどうするの?村とかはむずかしくてなかなかできないかもしれない。でも楽しそう。動物とかも飼いたい。(Kさん)
- ・楽しそうとしか言えない (Iさん)
- ・自分は村づくりの案に賛成!今までの経験を生かせる。(Mさん)

ぼくたちは、誰かにすごいと思われたくてやってるんじゃない

村づくりがスタートし、まず取り組んだことは沼地の新田開発でした。葦(アシ)が生い茂っている沼地を田んぼにできるのではないかと、土地を有効活用しようという思いで始めました。庁務員の中村さんから、掘って湧き水でため池をつくること・葦をとにかく抜いていくことをまずはやっていこうと教わり、早速取り掛かっていきました。沼地の奥の方は、ひざ下まで埋まってしまうほど水分が多く、そこに目星をつけて掘ってみました。しかし掘るだけの作業がなかなか進まない。大量の葦の根っこが沼地には張り巡らされているのです。田んぼをつくるにも、葦の根っこを退治しないとまた生えてきます。そんな根っこを見た子どもたちは一筋縄ではいかない新田開発の大変さを実感していくのでした。

しばらく田んぼを掘り続けていきましたが、弱音や文句を言う子はおらず、単調単純な「沼地を掘る」という作業に没頭していく子どもたちがいました。畑の作業をしている子や汚れたくないとなかなか沼地に入れない子も気が付けばみんなが沼地に入り、泥と葦の根を取りのぞく作業に夢中になっている。自分たちで決めた活動に責任をもつ。そして楽しむ。ここが5の1のいいところです。

しかし、もう6月に入り、田植えをしていかなければならない時期になりましたが、全体の4分の1も掘れていない現状がありました。「機械に頼るしかないのではないか」と話し合いに入りました。「もう機械を使うしかない。手でやりたかったけど仕方ない。お米ができなきゃ意味がない」という意見に対し、「ここまで自分たちの手でやってきたから最後までやりたい。今年はお米ができなくても来年までに田んぼを作っていけばいい。機械が作った田んぼにはしたくない」意見は真っ二つ。仕方のない現状ではあるが、どこかに自分たちの可能性を信じている子どもたちがいました。そこでもう一度、「自分たちの手でやることの意味」を考えました。「未来の長野小の子どもたちに残せる」「5の1が附属の歴史に残ってほしい」という声が上がりました。自分たちはすごい活動をしているんだな、と改めて実感していました。そこにNさんが「ぼくたちは誰かにすごいと思われたくてやってるんじゃない」と言いました。そうです。それは結果であって、作っていかなければ何も生まれない。鋭い意見に、子どもたちの心も響いていたと思います。話し合いの結果、手で作る場所と機械に頼る場所を分け、来年に向けて田んぼを大きくしていくことに決まりました。

私は、子どもたちが自分の言葉で、強いこだわりを持って意見を出し合う姿に心を打たれました。今までの活動や友との暮らしの中で身に付けた総合の力でもあるし、子どもたちの成長の姿でもあると思いました。思いがあふれるから生じるずれ。そのずれを平たくするかのように、言葉や思いをつなげていった5の1は、着実に前に進んでいます。

